ちづ

Chizu Town

智頭町勢要覧

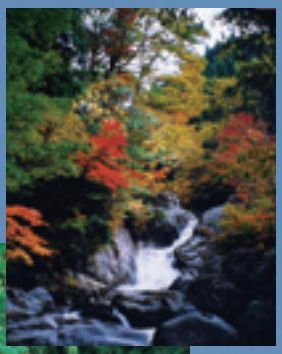
ちづの誇り

自然

四季映える原風景に抱かれて

淡く濃くうつろう山々、
その山の緑を乗せて吹く風
輝くせせらぎ、満天の星空―。
大きく豊かな智頭の自然は
私たちをまるごと受け容れ、
深い安らぎを与えてくれます。

まちのシンボル 杉



芦津渓谷

自然の囁きがこだまする疎開の地

鳥取県の東南に位置する智頭町は総面積の九割以上を山林が占め、一〇〇〇メートル級の中国山脈の山々に囲まれています。国定公園那岐山（なぎさん）からは、西に大山、北に鳥取砂丘という絶景が望め、日々表情を変えながら町を見守る牛臥山（うしぶせやま）、紅葉も鮮やかな芦津渓谷など、歩いてもドライブでも四季折々の素晴らしさを満喫できます。

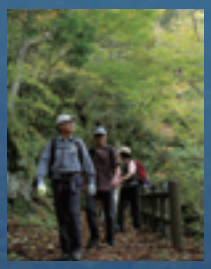
牛臥山

那岐山

人と自然との新しい関わり方

【森林セラピー】への取り組み

森の癒し効果は、科学的に実証されてきています。智頭町では豊かな森林資源を活かし、単なる森林浴ではなく専門のセラピストとともに、より効果の高い森林セラピーを実施し、心も体も元気になる森の里をめざしています。



牛臥山から智頭町中心部を望む

ちづの誇り

ひと

大きく広がる笑顔の輪

一人ひとりが智頭の大切な宝物。
すくすくと子どもが育つ。
年を重ねて一層輝きを増す。
「誰もが主役として暮らせること」
それが智頭の元気の源です。

世代を超えて村をひとつにする「村の便利屋さん」

日本1／0村おこし運動
浅見集落代表
春摘（はるつみ）要（かなめ）さんに聞く

【日本1／0村おこし運動（通称：ゼロイチ）】とは、町内の各集落がそれぞれの特色を掘りおこし、外の社会に開くことにより、村の誇り（宝）づくりを推進するものです。「人ひとりが地域を再評価し、自ら無（ゼロ）から有（イチ）への一歩を踏み出し共に発信することで、住民の自立と共有を培う取り組みです。

町内の多くの集落が1／0（ゼロイチ）運動に取り組む中、その最後発として参加した浅見集落。はじめは運動の煩わしさを懸念する声もありましたが、いまや村に欠かせない存在となっています。

「私は転勤族を脱して地元へ帰ったのですが、職場と自宅との往復だけ。マチにいた頃と変わらないなあ、と感じていました」と浅見集落振興協議会会長の春摘要さん。しかし若い世代で一度意見をぶつけあったのを機に、「世代を超えて村が和を持てるように」と、ゼロイチへの参加を検討。連日連夜の協議の末、上の世代の人たちにも合意を得られました。

「拠点として手作りでログハウスを建て、まずはお披露目も兼ねて忘年会をしたのですがほぼ全戸から人が集まりました」と嬉しそうに振り返る春摘さん。その後、納涼祭を企画したり、絶えていたイベントである「鱒とり」を復活させたりしました。

「テーマは〝人の笑顔〟。鱒とりも、子どもたちや県外の方など多くの人に喜んでいただいています」。

さらに浅見のゼロイチは、敬老会や村祭りなどの準備を村から請け負ったりと「村の便利屋」として活動を展開。「世代間の交流も生まれ、それまで総事や会合でしか集まらなかった村の人が、それ以外の楽しいことでも集うようになった。高齢者は、村の将来に希望を持ってくれているようです」と語る春摘さん。もっと浅見が元気になる仕掛けを温めているそうです。

智頭は、子どもの遊びと学びの宝庫です

森のようちえん
まるたんぼう代表
西村（にしむら）早栄子（さえこ）さんに聞く

「行ってきまーす！」と、元気のよい声。大きなリュックサックを背負った子どもたち、保育士のお兄さんについて西村さん宅を出発です。

「森のようちえん」には園舎がありません。雨の日も雪の日も、毎日森へ通います。日本では珍しいこのスタイルの幼稚園の生みの親が、西村早栄子さんです。

東京で生まれ育った西村さんは、縁あって鳥取で林業の仕事に就き、智頭の民家で宿泊研修を体験。豊かな自然と温かな人々に魅せられ、「いいなーっ、ここで子育てしたい！」と家族で移住を決意しました。

智頭の住民となった西村さんはまちづくりや住民の会議にも積極的に参加。そして以前から興味のあった「森のようちえん」を提案し、「森のようちえんを作る会」を立ち上げ、試運転期間を経て平成二十一年に正式に開園しました。

「ここでは、ああしなさいとか、これはダメとか、そんな指示や禁止は一切しません。子どもたちは森で、どんどん遊びを見つけます。大自然の中で自主性や協調性が磨かれ、感性も本当に素晴らしいですよ」と西村さん。

「智頭には豊かな森があり、また近所の人々も子どもたちを見守ってくれる。ここで育った子どもたちが将来どんな大人になってくれるか、楽しみで仕方ないです」

いきいきと話す西村さんの笑顔は、夢と期待にあふれています。

ちづの誇り

暮らし

実り豊かな里山暮らし

広がる田畑と温かな人びと。
心の底に求める「故郷」がここにあります。
みんな、みんな智頭へ帰ろう。
ほら、「おかえりなさい」が聞こえる―。

人の中で、自然の中で、自分の存在を実感します

大阪府出身
津田英樹（つだひでき）さん

板間には囲炉裏、土間には暖炉とテーブル。津田英樹さんが暮らす新田地区の萱葺き古民家は、一度入ってしまうとわが家のようにくつろいでしまいます。

「昔の家って、そういうリズムでできてるんでしょうね。初めて来るのに〝懐かしい！〟っておっしゃる方もありますよ」と津田さん。何かと人が集まりやすく、深夜まで飲む事もしばしば。ここでは時がゆっくり流れます。

「智頭は四季がはっきりしていて、窓から眺める山は毎日色が変わります。この広い空間、家も、空も山も全部まるごと自分の周りにある。とても贅沢に感じます」。

津田さんは現在、大阪時代の実績を活かし福祉の仕事をしていますが、仕事でも暮らしでも、自分の存在の感じ方が以前と違うそうです。

「自分がどう役に立っているかを実感できる。

人が少ない分、一人ひとりの存在感がとても大きいのです。私も村の構成員ですから、果たすべき義務はたくさんあります。自分も地域の一員だ！という自負を持って、村の人のさりげない支えを毎日感じて生活できる。都会にはない充実感を感じます」。

豊かな自然の中で互いに支え合う。昔から人はそう生きて来た、そんな暮らしがここにあります。

私らしく、私の暮らし―ここに出会えて良かった

兵庫県出身
澤田直見（さわだなおみ）さん

営業時間は「日暮れ頃まで」という、のんびりとしたカフェ「ぽすと」。オーナーの澤田直見さんは、関西からのIターン定住者です。

「私としては別に特別な事ではなく、ただ仕事を見つけてお引っ越しして来ただけなのですけど」と微笑む澤田さん。

「智頭へはあまり深く考えずに憧れだけで飛び込んだのですが、その憧れは全く裏切られてないです」。

智頭に暮らし始めて気付いたのは「田舎暮らしは忙しい！」ということ。「畑仕事を日常に組み入れると、キリがないですね」と、「大変」と言いながらも楽しそう。

そんな澤田さんは、言葉絵作品の作家としても活動中。温かな色と言葉に多くのファンがいます。

「作品で〝強いメッセージや情報を発信しよう〟というつもりはないのですが、憧れていた田舎で

の日々の営み、私の暮らしそのものが、何かのメッセージになったらいいなあと思います」。

しかし友人からは「色遣いが変わった」という指摘もあったとか。

「いい景色を見てるなあと思える、と言われました（笑）。私は何も意識していないですが、でも望んでいた暮らしをさせてもらってる、という満足感はあります」。

澤田さんは今日も、楽しい忙しさを満喫しています。

ちづの誇り

福祉

共に活き活き生涯現役

生まれ育った土地で心地よく
生涯生活できるのはとても幸せなことです。
その実現のため保健・医療・福祉を中心に
子どもからお年寄りまで、一人ひとりの
健全な暮らしをサポートします。

めざす保健・医療・福祉の連携―

住み慣れた土地で安心して暮らすために―

保健・医療・福祉総合センター ほのぼの

〝健康の保持と増進、疾病の予防、治療とリハビリ、各種の福祉サービス、を包括的に提供するため、保健センター・病院・社会福祉協議会が一体となった総合施設です。また、だれもがいつでも利用できる、町民の交流拠点としての機能も備えています。

福祉 社会福祉協議会

智頭デイサービスセンター

特別養護老人ホーム「心和苑」、デイサービスセンターの運営のほか、在宅介護を支える訪問介護や訪問入浴介護などのサービス、介護計画を作成する居宅介護支援を行っています。

医療 智頭病院

智頭病院ロビー

一般検査から救急医療まで、迅速な対応で安心の医療を提供します。また、「ほのぼの」の中核を担う施設として、健康指導やデイケア、訪問看護など在宅療養にも力を入れています。

保健 保健センター

保健センター介護指導室

健康づくり推進室では、母子保健、お母さんのための子育て支援、感染症予防、生活習慣病予防や健康増進、精神保健など町民の健康保持・増進に取り組んでいます。

充実した在宅医療、福祉サービス

必要な機関が同じ施設内にある―これが「ほのぼの」の一番大きな強みです

在宅サービスを必要とする利用者について、医師・看護師・薬剤師・栄養士・保健師・ケアマネジャー・介護士など各機関のスタッフで構成された「在宅チーム」が即座に連絡を取り合い、多くのケアメニューの中から、その方にとって最良の対応方法をじっくり検討します。

「在宅チーム」スタッフ

デイサービス

「在宅チーム」カンファレンス

訪問入浴介護

石谷家住宅 正面

ちづの誇り

歴史 伝統 文化

受け継がれる まちの宝

当時の風情をとどめる宿場町
大切に受け継がれる祭りや行事。
古いものも新しいものも
智頭の文化は人びとのこころを
豊かに潤してくれます。

時代を物語る歴史的建造物―

◉石谷家住宅

鳥取藩最大の宿場町として栄えた智頭宿に威容を誇る石谷家住宅。敷地面積約三〇〇〇坪に、広大な日本庭園、四〇の部屋と七棟の蔵をもつこの建物は、貴族院議員であった石谷伝四郎が大正八年から約一〇年の歳月をかけて新築したもので、国重要文化財となっています。

石谷家は屋号を塩屋といい、元禄時代の初めに鳥取城下から移り住んで本拠を構え、分家をおこし繁栄しました。江戸後期には「大庄屋」に任ぜられたほか、地主経営や宿場問屋を営み、その後も地場産業の振興を図るなど明治、大正と近世～近代を通じて町の発展に尽くしました。

撮影 三沢博昭

古き良き、先人の暮らしを映す―

◉板井原

まちの中心より約五キロほど離れた板井原集落。山々に囲まれたこの山間地は、平家落人の隠れ里として伝えられてきました。村は伝統的な焼畑、炭焼き、水田稲作や葛、麻などの林産物、また近代になってからは養蚕を主産業として栄えました。村内に現存する茅葺き住宅などの建造物からは、農山村文化の形成過程が見て取れ、貴重な歴史的文化財として今に受け継がれています。

平成十六年 鳥取県伝統的建造物群保存地区 選定

虫井神社の奉納行事　麒麟獅子舞

雪景色に灯火映える　智頭宿雪まつり

人々の想いが込められた新田の相生文楽人形浄瑠璃

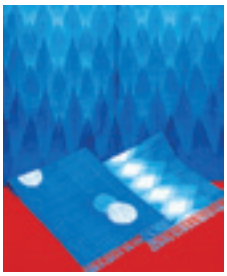
「高尚な娯楽を通して健全な村をつくりたい」―新田村の青年・岡田太平治の志により明治7年、新田の人形浄瑠璃は生まれました。一座を結成し巡業によって技を高め、さらに人形遣い師の泉谷錦枝や人間国宝・桐竹紋十郎の指導のもと、芸は磨かれていきました。名声と共に豊かな人間性をも高めたこの伝統芸能は今もなお、地域に潤い続ける貴重な文化遺産です。

素朴な佇まいの中に荘厳な気風が漂う豊乗寺

平安期の嘉祥年間（845～851）に、弘法大師の高弟・真雅僧正によって開かれた豊乗寺。天正の兵火により焼失しましたが、かつては僧坊が6坊、さらに複数の末寺があったことから、盛大な勢力を保持した時代の栄華を読み取ることができます。また、平安仏画の代表作の一つといわれる国宝「絹本著色普賢菩薩像」など多くの文化財を有する寺として知られています。

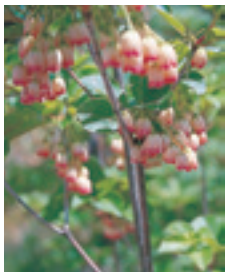
地域の温もりあふれる特産品

智頭の豊富な環境に育まれる杉を用いた木工品やどうだんつつじ、また清らかな風土を活かして作られる「諏訪酒造」の銘酒「諏訪泉」や「藍染工房ちずぶるー」の藍染製品など、ふるさとの薫りがただよう名産・特産品が多数あります。



ちずぶるー

諏訪泉



どうだんつつじ

杉製品（杉玉）

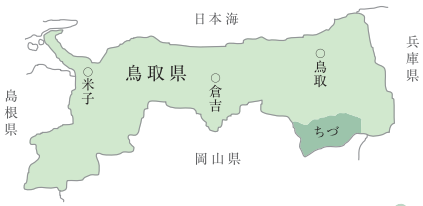
みどりの風が吹く疎開のまち ちづ

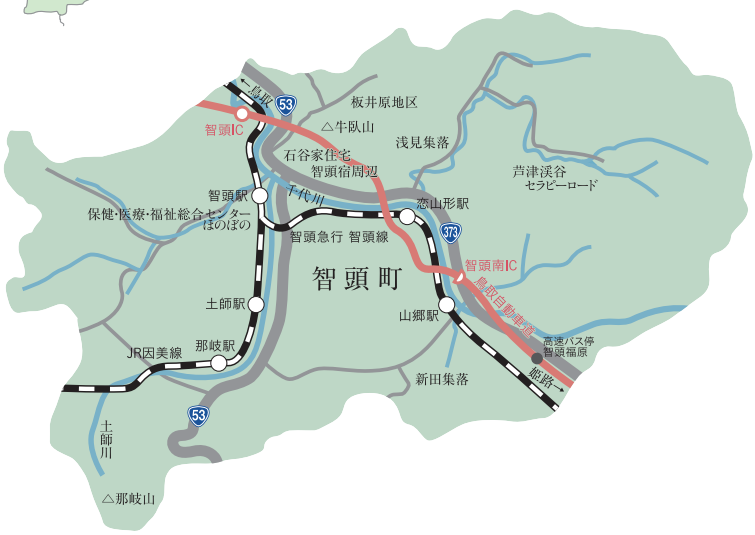
—智頭町勢要覧—

企画・編集

智頭町役場 企画課

〒689-1402 鳥取県八頭郡智頭町大字智頭2072番地1
TEL. 0858-75-4111 FAX. 0858-75-1193
URL. http://www1.town.chizu.tottori.jp/





智頭町へのアクセス

JR	大阪（智頭急行）⇒約2時間 京都（智頭急行）⇒約2時間30分 岡山（智頭急行）⇒約1時間20分 鳥取（JR因美線）⇒約30分	自動車	大阪（中国自動車道・佐用JCT～鳥取自動車道〔一部R373〕）⇒約2時間30分 岡山（R53）⇒約2時間10分 鳥取（R53～鳥取自動車道）⇒約40分
バス	東京（キャメル号）⇒約9時間30分 大阪（日交特急バス）⇒約2時間25分 鳥取（日ノ丸バス）⇒約50分	飛行機	東京–鳥取⇒約1時間10分

発 行 平成22（2010）年3月　　制 作 株式会社ぎょうせい
表 紙 「町の木」杉を表現した「藍染工房 ちずぶるー」の作品